The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	海の見える杜美術館蔵『舞の本絵本』の挿絵について：「伏見常盤」を中心に
Author(s)	酒井, 公子
Citation	デザイン理論. 2022, 79, p. 54-55
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/86310
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

海の見える杜美術館蔵『舞の本絵本』の挿絵について
「伏見常盤」を中心に

酒井　公子　京都工芸繊維大学大学院在学

はじめに

海の見える杜美術館には，特大の豪華な絵本 47 冊がセットになった『舞の本絵本』（以下，海杜本）がある。一部欠けや定番物とは異なる話が入るものの全 36 話が収められている。『舞の本』とは，室町時代に流行した語り物芸能である幸若舞曲の台本を読み物としたものだが，狭義には寛永年間（1624–44）に刊行された絵入り整版『舞の本』（以下，整版本）のことを指す。それほど整版本の普及率は高く，以後作られた『舞の本』作品の多くに強い影響を与えたとされる。寛文・延宝年間（1661–81）の作とされる海杜本も整版本が粉本とされており，制作者の記録などはないものの本文の筆跡・挿絵・装丁などからアイルランド・ダブリンのチェスター・ビーティ・ライブラリに所蔵される『舞の本絵巻』6 巻を中心とした絵巻群（以下，CBL 本）との類似性が認められ，両者は極めて近い位置で制作されたと考えられている。また，各本の最初に「游焉館圖書」の朱文長方印が押されているため，豊後松平家の旧蔵書であったと推測されている。

今回取り上げる海杜本「伏見常盤」は，挿絵は全 9 図と元となったとされる整版本と同数である。しかし，整版本との類似性を見出すことができない挿絵 2 図を有している点が見過ごせない。そこで本発表では，海杜本とこれまで強調されてこなかった整版本以前の作品との関わりを見ていく。

なお，「伏見常盤」の梗概は以下の通りである。常盤は源義朝の妻となり 3 人の子をもうけたが，平治の乱で夫が敗北したため幼子らを連れて大和へ逃れようとする。清水寺参拝の後，伏見の木幡山に入ったが雪道に迷う。運よく一軒の家を見つけ宿を頼むが，後難を恐れた老夫婦に断られる。軒先で子をかばいながら念仏を唱え続けた常盤は，結果招き入れられる。そのうち美しい上臈逗留の噂に近隣の女 5 人がやってくる。常盤は偽りの身の上話をし，女たちは同情してそれぞれの出身国の田歌と舞で常盤を慰める。

海杜本「伏見常盤」の位置づけ

作品の本文は整版本からの増補・削除された部分はなく，漢字と仮名の使い分けを除けば完全に一致し脱文もなかった。そのため整版本を用いて本文は制作されたと考えて間違いない。本文内容を視覚化する挿絵は，文章が同じで絵の配置場所が近いのであれば同場面を表現するので，例えば完全に挿絵の位置が一致する第 3 図は，海杜本が本の左，整版本が右に入っているにも関わらずよく似た図様が描かれている。

しかし清水寺へ向かう場面を示すだろう第 2 図，舞が披露される場面を示すはずの第 9 図がそれぞれ異なる図様を示している。海杜本第 2 図には建物の前を足早に急ぐ常盤親子が描かれるが，整版本では親子が橋の上にいる。本文中に橋が出てくるのは清水寺参拝後の道中なので，整版本に違和感がある。海杜本第 9 図は，右手に笠を持つ女が中央で踊り，その周りに常盤親子と老夫婦，4 人の女の姿が見える。しかし，整版本には女たちの姿はない。整版本の挿絵がそもそも本文内容にそぐわない形となっていた。この矛盾は，慶長年間

（1596–1615）に刊行されたとされる絵入り古活字版（以下，古活字版）の存在により説明がつく。整版本の挿絵は古活字版の第1・4・5・8・10・12・13・14そして11図から採用されていた。しかも14図から選び出した9図を元とは異なる場所に入れ込んだため，本文内容と一致しない挿絵が生まれたことが分かった。

ただし，海杜本と古活字版を比較しても，清水寺に向かうまでの道中の図においては背景が異なる点，舞が披露される場面では海杜本は2図で絵画化されるのに対し，古活字版も整版本と同じく1図のみであった。だが，本文に一致しない製版本の挿絵2図を海杜本は有していない点，残りの7図は酷似していることから，海杜本は古活字版を見本の1つとしたと考えるのが妥当であろう。

海杜本と諸本との比較

整版本誕生以前から「伏見常盤」は絵入り本化が盛んであり現在15作程度の写本が知られているが，そこから桃山時代の作とされるサントリー美術館蔵『伏見常盤絵巻』（以下，サントリー本）と，江戸時代の作とされる富美文庫蔵『ふしみときは』（以下，富美本），そして海杜本ともっとも近しい関係にあるCBL本について検討する。

詞書と絵が混在する絵巻であるサントリー本の挿絵は全16図で，上下2冊からなる横本の富美本はそれぞれ8図・6図で全14図ある。5人の女が来訪し常盤親子と老夫婦が集まる図が話の通り先に，嘘の身の上話を絵画化した図が後に置かれている点が海杜本と異なり，舞う女性を中心に登場人物たちが楽しんでいる絵が2図続いている点が海杜本と共通している。

古活字版とも異なる清水寺までの道中を絵画化した場面において，特に富美本で画面奥に建物が描かれている点で海杜本との共通点が見出せた。また舞が披露される場面において，海杜本及び古活字版では柄杓を持った女性が描かれるのに対して扇を持って描かれる。本文に記述のない扇を2作品で見られることから，これらを制作するにあたって見本となった流布本の存在が考えられる。続く図では海杜本と同じく笠を持つ女性が見出せた。幸若舞曲の持つ予祝性を示すかのように舞の図が最後に2図続くことから，比較的早い段階で古活字版とは異なる図様を持つ作品から踏襲されたものと考えられる。そこには女5人が来訪し皆が集まる図，嘘の身の上話の図，扇の女性，笠の女性と続く4つの挿絵があったであろう。

CBL本は，画面形式の違いから起こる構図のズレ，筆遣いや顔料の濃さを含む描写表現，全図に共通する金色の霞が異なる描かれ方をするものの，人物や事物の位置など全てが海杜本と酷似する。ただしごくわずかな差異から本文をより忠実に絵画化しているのは絵巻であるCBL本であることが分かる。先の2作品と違い，海杜本とCBL本は挿絵のみならず表紙や料紙の装飾にも金を多用するような大変豪華な作品である。時代的にもサントリー本らよりも少し後，整版本が作られて本文の固定化が進み，挿絵を入れる場所が制限されるようになると図様も固定化されたことが分かる。海杜本はそんな作品の中で最上級の豪華版『舞の本』の1つとして，大名家の棚飾りや嫁入り本として作られたことが推測される。

おわりに

これまで整版本との関わりが強調されてきた海杜本だが，「伏見常盤」の挿絵に関しては本文内容に対して矛盾した挿絵2図を有する整版本の影響を受けているとは言いがたく，むしろ整版本と同じ図様を持つ絵入り古活字版までさかのぼって考証した跡が見受けられた。またサントリー本・富美本との比較検証から別の流布本の存在が示唆でき，そちらも考証対象とした可能性がある。非常に大型で豪華な作品である海杜本は，絵巻であるCBL本と共に当時存在していた作品の中で最も豪華な『舞の本』を時の権力者が作るべくして作った作品であったと考えられる。